

令和8年度未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会（小学校国語）

1 目的

各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び授業改善に関する講義・説明等を行うことにより、小学校教員の指導力向上を図り、もって児童の学力向上に資する。

2 主催 大分県教育委員会

3 期日 令和8年5月19日（火）13:30～16:20

4 場所 コンパルホール 3F 多目的ホール

5 内容

（1）開会行事「大分県教育委員会あいさつ」

義務教育課 課長 桐野 潤

まず、先生方の日頃の学力向上への尽力に感謝を述べた。

そして、令和7年度の全国学力・学習状況調査の結果を報告した。結果は、全国平均を上回り、国語の授業内容がよく分かるとの回答も依然として高い状態である。これらは先生方の日頃の実践の成果であることから、引き続き魅力ある授業実践を求めた。

また、SNS や AI の普及により言語能力の重要性が高まっていることにも触れ、今後は課題を焦点化し、より一層充実した授業に取り組む必要があると強調した。最後に、参加した先生方は、本日の内容を各地域に持ち帰り、管内全体で広めていくことが期待されている。



（2）行政説明・協議「大分県における小学校国語科の課題と授業改善」

〈説明者〉義務教育課 指導主事 釘宮 里枝

今回の協議会では、大分県の国語教育における成果と課題が明確にされ、今後の授業改善に向けた具体的な方向性が示された。

① 行政説明

現状と成果：大分県は、令和7年度全国学力・学習状況調査において、国語の平均正答率が全国平均を上回り、「知識・技能」および「思考・判断・表現」の領域で高い結果を示している。これは、教師が意図的に指導する内容と児童が学習を意識する内容が一致しているためと考えられる。

課題：「目的に応じて、文章や図表などから必要な情報を見つける」という問題において、教師・児童ともに意識は高いものの、正答率が低いという課題が指摘された。この問題では、教師の指導と児童の意識の間には乖離がないにも関わらず、実際の「情報を見つける力」が十分に発揮されていない可能性が示唆された。特に、情報を解釈し、自分の考えと結びつける再構成の段階で課題が見られることについて、全国学力・学習状況調査の問題を例に挙げて説明された。

② 協議：情報を見つける資質能力の育成

課題を踏まえ、参加者間で「目的に応じて、文章や図表などから必要な情報を見つける」という資質能力を育成するための学習活動について協議が行われた。

グループ協議のポイント

- ・ **情報の整理・再構成：**児童が収集した情報を単にまとめるだけでなく、目的意識をもって整理し、自分の考えと関連付けて再構成する活動の重要性が議論された。
- ・ **シンキングツールの活用：**授業支援アプリや付箋、各種シンキングツールを用いて、情報を視覚的に整理し、共通点や関連性を発見する支援が提案された。
- ・ **言語活動の具体化：**資料からキーワードを抽出し、それらを関連付けて構成する練習を通じて、論理的な思考力と表現力を高める工夫が検討された。

・ B グループ代表

3 時間目に資料からわかったことをカードに書き出し、シンキングツールで共通点や関連

事項を整理する。4時間目にグループで共有し、資料の見方や考えを交流することで新たな気づきを促し、自分の立場（賛成・反対）を明確にする。

・Hグループ代表

各自の資料から気づいたことを付箋にキーワードとして書き抜き、グループで並べて共通点をまとめ「こういうことが言える」というところまで3時間目で行う。その後、伝えることに向けて優先順位を付け、番号を付けて再構成する。

・オンライン代表

子どもが興味関心を示した資料から課題を設定し、シンキングツールで整理する。友達の意見を収集して自分に足りなかった視点を補い、最後に構成に気をつけてまとめる。

③ 指導主事によるまとめ

グループ協議の内容を踏まえ、授業改善に向けた3つの重要な視点を提示した。

1. 教師の指導目標の明確化

教師が児童に身に付けさせたい資質能力を明確にし、それに即した正確な指導を行う。

2. 児童の学びの可視化と振り返り

児童が何を学び、どのような力が身に付いたかを具体的に振り返る機会を設ける。単に「楽しかった」ではなく、「どのような学びがあったか」に焦点を当てる。

3. 資質能力の定着と汎用性の確認

授業で学んだ資質能力が、他の学習場面でも活用できるかどうかを確認する場を設定する。同じ指導事項を繰り返し経験させることで、資質能力の定着を図る。



（3）講義「学習指導要領の改訂に向けて、小学校国語科における、今、大切にしたい取組」

<講師> 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官

大塚 健太郎 氏

学習指導要領が目指す「主体的・対話的で深い学び」の実現に焦点を当て、特に「読むこと」の指導における課題と、それを乗り越えるための具体的なアプローチを詳説された。

1. 「読むこと」の動機付けと目的意識

「読むこと」の出発点として、子ども自身の内発的な動機付けが最も重要である。教師は、子どもが「読みたい」「知りたい」と心から思える状況を作り出すべき。日常の出来事から知的好奇心を刺激する問いを投げかけ、これまでの知識や経験を振り返らせる工夫が必要。また、読書活動が具体的なアウトプットへと繋がる「目的意識」をもつことも不可欠。最終的にどのような文章を書かせるかという明確な目標を設定することで、子どもは能動的に資料を読み解き、自身の表現へと主体的に進めることができる。

2. 資料の活用と情報の整理能力

現代社会は情報過多の時代であり、「資料活用能力」が強く求められる。これは単に検索するスキルに留ま

らない。集めた情報をいかに整理し、自身の思考に統合していくかという、より高度な情報整理スキルがその中核をなす。自分の意見を補強するため、あるいは多様な資料を読み込む中で新たな意見を形成するために、目的によって資料の選び方や読み込み方は大きく変わる。情報を分類し、相互の関係性を見出し、自身の思考と結び付けることで、初めて情報は意味のある知識へと昇華される。

3. 「言葉」への深い理解と指導の系統性

学習指導要領が目指すのは、「言葉そのもの」への深い理解。各言語活動（話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと）は、すべて「言葉」という共通の基盤の上にある。各領域の学習が個別化しすぎている現状を課題とし、それらを横断的に捉え、統合的な視点から指導することの重要性が説かれた。例えば、「書くこと」と「話すこと」は、異なる媒体を用いるものの、自身の考えを他者に表現するという本質においては共通している。これらを関連付けながら学ぶことで、言葉の持つ多面性や表現の奥深さを理解できる。また、他教科の内容を扱う際も、言葉そのものの使い方や論理構造に焦点を当てることで、教科横断的な学びと言葉への意識を同時に育む。指導の「系統性」も重要。低学年から高学年へと進むにつれて、どのような知識やスキルを段階的に習得していくのかを教師が明確に把握し、一貫性のある指導を行う必要がある。

4. 主体的・対話的で深い学びの実現

「主体的・対話的で深い学び」を具体的な行動につなげ、「持続可能な社会の作り手」を育成するには、学んだ知識やスキルを多様な文脈で繰り返し活用し、生きた知識とすることが不可欠だ。この「作り手」とは、社会の課題を発見し、他者に対話しながら解決策を探り、自らの人生を切り開ける人材を指し、言葉の理解・表現力、自己認識・自己肯定感、言葉の機能とメタ認知能力の育成が求められる。

教師の役割は、子どもの内発的動機を引き出し、挑戦を促し、知識・スキルの活用文脈を示すことで、子どもたちの可能性を最大限に引き出す環境を整えること。

「主体的・対話的で深い学び」の実現は容易ではないが、「読むこと」指導の深化を通じて、子どもたちが言葉の力を最大限に引き出し、社会の「作り手」となるための確かな基盤を築ける。教育現場は、これらの提言を受け止め、次世代の育成に注力する必要がある。



（４）閉会行事